



分前には四〇〇人近い参会者で埋め尽くされた。

午前十一時、アンジェラスの鐘が高らかに鳴り響いた。入祭「栄光は世界におよび」が歌われる中、地主司教と十七名の司祭団が入堂。一五〇周年記念感謝ミサが荘厳に執り行われ、神を讃える心が一つになった感動と喜びのミサ聖祭であった。

元町教会では、一五〇周年を迎えるにあたって、先ず目標とすべきビジョン《一五〇年に亘る先人たちの祈り、犠牲、労働、実りに感謝し、次代へ引き継ぐ福音宣教する教会の発展》を考え、それを合言葉に、さらに無原罪の聖マリアを通しての『一五〇周年の祈り』を作って、いつも祈りつつ、願いつつ喜びの



日を迎えた。そして、ミサの中で信者からの祈りを花東にして奉納した。

この一年間、元町教会では様々な霊的プログラムを実践しながら、その中で信者一人ひとりが先人に学びながら、自分の信仰を改めて見つめ直し、霊性を深めながらそれぞれが新しい宣教に結び付けていくための信仰リニューアルの機会と

した。

マリア会館での展示も人氣があった。歴代二十八人の神父の肖像、教会の宣教の歴史を伝える資料、昔懐かしいミサ用の刺繍入り祭服と聖具など、元町教会ならではの珍しい、且つユニークな展示品に食い入るように見学していた大勢の人たち。(展示は年内開催中)

記念祝賀会も、アンジェラスの鐘が会場に鳴り響き、参加者の手拍子の中、入場した元町白百合幼稚園児四十数名によるエンジェルコーラスで始まり、会場の雰囲気は初めから和やかなムード一色になった。地主司教、シエガレ日本管区長(パリ外国宣教会)、西尾函館市長の祝辞の後、一五〇周年のために特別に作詞・作曲された『慶祝歌』の披露、映像「懐かしの一場面」の上映等、最後まで平和・愛・喜びに包まれた祝賀会となった。

ミサのたびに、主と共に生きる力をいただいて、それぞれの生活の場にキリストから派遣される私たちが、新たな宣教の使命を果たしていくことができるよう、祈り続けたい。慈しみ

深い神さまのお恵みに感謝いたします。

【元町教会の略歴】

一八五九(安政六)年に函館開港と同時に宣教が始まる。一時期、パリ外国宣教会の宣教師で新しく日本に派遣されて来た宣教師が元町教会で日本語を学び、新たな任地に赴任して行くことがあり、司祭の異動が激しかった。一九〇〇(明治三十三年)、北日本最初の邦人司祭トマス新谷雄三郎師がベルリオーズ司教より叙階される。また、邦人最初の司教であるヤヌアリ早坂久之助司教が一九一四(大正三)年から翌年にかけて助任司祭を務められた。

一八七七(明治十)年頃に二代目の木造の聖堂を建立。一九〇七(明治四十)年の大火で焼失し、三代目のゴシック式レンガ造りの聖堂を建立。一九二一(大正十)年に大火で聖堂は外壁を残し焼失し、一九二四年(大正十三年)に四代目となる現在の聖堂である新聖堂が完成し感謝のミサが捧げられた。歴代の主任司祭は二十八名にのぼり、現主任司祭はパリ外国宣教会のジュール・ロー神父である。

旭川六条教会
五十五周年

十月十七日にペトロ口地主敏夫司教の司式で、旭川地区の司祭を始め縁の人々が多数参加してお祝いのミサが捧げられた。一九五四(昭和二十九)年、雪解けを待つて小聖堂付の司祭館を着工。旭川で三番目の教会としてスタートして、最初の信徒数は、旭川五条教会から移籍した六十一人。

【旭川六条教会の略歴】

現在地に九六五㎡の土地を取得し、一九五四年に小聖堂付の司祭館が竣工。翌一九五五(昭和三十)年に隣接地七四三㎡を取得し、教会付属の聖母幼稚園と聖堂を建設する。その後、教勢の発展と共に聖堂、司祭館、伝道館を新築するが、一九六八(昭和四十三)年に、伝道館と司祭館の一部を消失。翌年に修復し現在に至っている。

初代主任司祭はラジスラオ・フレッシュ神父で、以降、ロータ・ポレンバ神父、山東龍雄神父、鈴木宗太郎神父、テオドル・シーベル神父、ウルバン・サワビエ神父、鈴木央神父、佐藤宝倉神父、続橋和弘神父が主任司祭を務められ、現在は、鈴木央神父が主任司祭。

北二十六条教会
五十周年

九月二十七日(日)午後三時から、ペトロ口地主敏夫司教の司式で、聖堂溢れる修道者、信徒が集い厳かな雰囲気の中で五十周年を祝うミサが行われた。

説教の中で、北二十六条教会で過ごした二十九歳代の助任時代の懐かしいエピソードを交えながら、初代主任司祭の中川寿神父の思い出や当時一万ドルの聖堂と

呼ばれたこと、一九五六年当時米国オグデンスパーク教区の司教だったナバーリ教(教会保護者「北の国の聖母」の命名者でもある)をはじめ多くの人々の支えで出来た教会であることを話された。そして、朗読された聖書に記されているように、教会はキリストのなめ石の上に建てられているので、教会は信徒一人ひとりがキリストの働きを行うことが大切なことである。この教会は多くのことの役



【北二十六条教会の略歴】

一九五三（昭和二十八）年に教会用地を取得し、五年後の一九五八（昭和三十三年）年に建物の着工に入り、一九五九（昭和三十四）年九月二十七日に新聖堂が献堂。一九六三（昭和三十八）年に増築がなされ、一九八六（昭和六十一）年十月二十六日には、現在の聖堂が新たに献堂された。主に北十一条教会から移動した信徒二〇九人で始まった。初代主任司祭は

中川寿師で、以降、林忠実師、近藤光彦師、場崎柔農師、佐々木輝男師、後藤義信師、上杉昌弘師、勝谷太治師、久保寺緑郎師が務められ、現在は、パリ外国宣教会のエムリク・ド・サルベル師である。

【登別教会 創立五十周年】

十一月一日に献堂五十周年を祝うミサが行われた。登別教会は東室蘭教会の巡回教会として幌別町に始まる。当初の名称は幌別教会で、一九七〇（昭和四十五年）年の市制施行に伴い登別教



会と改称する。創立当初の東室蘭からの移籍信徒は四十一名。

【登別教会の略歴】

一九五九（昭和三十四）年十一月に一〇七㎡の聖堂を献堂。その後、一九六四（昭和三十九）年に教勢の発展に伴い、伝道館と司祭館一八二㎡を春に着工し九月に落成。同年、初代主任司祭として、ヘルトランド・グラムスパーカー神父が着任し小教区として動き出す。以降、ピーター・ウオルシュ神父、ドナルド・ヴィッテングル神父、エドモンド・ライアン神父、ジョゼフ・メイナード神父、ジェイムス・マイレット神父、リジス・ギング神父、フランシス・ライヤ神父、ジェラード・ボーソレイ神父が主任司祭を務め、現在は宋榮峻神父（東室蘭主任

美幌教会

五十周年

九月十三日（日）午後二時から主任司祭のポボ・アルフォンソ神父の司式で約七十名が参列し記念ミサとお祝いが行われた。心温まる雰囲気の中で、小さい教会共同体を通して働かれたこれまでの五十年の歩みを思い起こして、その恵みと慈しみに心から感謝を捧げ、これからの福音宣教の力を改めて祈り求めました。

【美幌教会の略歴】

一九四九（昭和二十四）年秋、北見教会のジジモ・ヨルダン神父が、美幌の信徒宅に巡回してきたのが宣教の始まりだった。一九五



八（昭和三十三年）年十一月三十日、現在地に待望の新聖堂の献堂式が行われた。一九八五（昭和六十）年九月十六日には、二代目聖堂の献堂式が行われた。信徒数は三十五名で始まり一九六三（昭和三十八）年には四十名。初代主任司祭はヘルメス・ファン・フリート神父。二代目主任司祭ヴァレリコ・オストゥルム神父が一九七〇（昭和四十五年）年四月に紋別教会に転任後は北見教会の巡回教会となり現在に至っている。

灯台の聖母 トラピスト大修道院長祝福式

九月二十三日午前十時から当別トラピスト大修道院聖堂にて厳かに行われる



父、札幌教区司祭の黙想中で十数名の教区司祭が臨席しての式となった。任期は六年。
ミサの中で、地主司教が、神からの思し召しとして長上の道を歩むように激励し、さらに共同体には新大修道院長へのさらなる協力を求めた。

式は、「決意の確認」「祝福の祈り」と進み、聖ベネデクトの戒律、指輪、十字架、ミトラ、牧杖が授与された。紋章は、三位一体を表したミトラと燈台の聖母大修道院共同体を示した本館正面のシルエツト、中央に大十字架、下には大修道院長のモットー「静かにしているならば救われる」のイザヤ書の言葉が書かれている。

共同体の父、御父の代理者として、神に全き信頼を置き、その職責を果たされるように、教区のすべての信徒が祈り願っていきましよう。

当別トラピスト大修道院待望の、六月二十六日に選出にされたフランシスコ吉元邦彦（五十一歳）大修道院長の祝福式が、札幌教区地主敏夫司教、福岡教区宮原良治司教、東京教区幸田和生補佐司教の共同司式により挙行された。

母院長代理のエリック神

教区の活動

札幌カリタス

第十回社会福祉シンポジウム開催

「社会福祉団体パネル展」と「地球のステージII」ありがとうの物語」上映

二〇〇九年八月八日（土）十時から、藤女子大

学北十六条校舎で、十八団体と、およそ一〇〇人が参加して行なわれた。団体相互間の交流をはじめ、紛争地域で医療や精神的ケアの援助を続ける桑山紀彦医師



の映画を通して、それらの地域の子どもたちの現状を垣間見ていただけたことだろう。

地主司教挨拶

パパ様が言った印象的な言葉に「多くの様々なことを皆さん知っているでしょうが、皆さんが知らないものがあります。それは修道会の数です。」と言ったことを思い出しました。

それと同じように、博愛事業や、慈善の草の根活動を行っている団体の数は多岐にわたります。全てに係わっていくことは不可能であるとともに、札幌カリタスの目指しているものは、キリストの心をもった愛の仕事であり、そのような活動に係わることです。

現在、政府の制約を受けたりして、政治的にも各団体は経営的にも大変であるが、キリストの心をもった活動をしていく団体と手を組み、助けて、そのような事業体と協力していきたいと考えています。しかし、その事業

をやるために活動が必要なのではなく、キリストの愛を実践するために事業を行うこと、活動することが大切なのだということを心に留めておいて下さい。食べ物や物を困った人に与える慈善事業ももちろん大切なことです。しかし、施しのみ（あるいは施しを主体に）行っている団体が多くなっていると思います。

わたしたちが初代教会で最初に与えられたのは、宣教であり、言葉で述べ伝える仕事です。そして、聖職者以外の皆さんがそれを行うことが、現代ではとても大切なことです。皆さんと協力して、キリストの心をもった愛の仕事を、さらに広げて行きたいと考えています。

団体代表から一言

各団体ともキリスト教精神を大切にしようと考え活動していると思います。つい日常の活動・生活の中では、忘れがちになってしま

います。しかし、ふと立ち止まり考えたり、お祈りに支えられているとつくづく感じます。神さまに感謝しています。

会場内の平和のオブジェに貼られた参加者からのメッセージを紹介



きていたらいいです。★神さま 私を平和の道具としてお使いください。憎しみのあるところに愛を、争いのあるところに平和を、世界の人々が弱い人を責めませんように。

対等な立場にある人が笑って別れるような、そんなケンカが存在しない、さわやかな世界になりますように。

★日本人の豊かさを、世界の貧しい国に分けて上げて下さい。

★絶対に奪えないもの、それは笑顔、笑顔は平和を運んでくれるもの。世界が笑顔で輝きを取り戻せますように。

★おろかな戦争、何の意味も持たない戦争、憎しみやエゴをすて、世界中の皆が感謝の種をまけば平和になれるよね。

★神様の意志を行って自分の自分になります。神様助けてください。

★アリッサが話してくれたことで、はじめのことは、私も神様にお願いをし、なくしてほしいと思えます。平和がたもてる世界にずっとしていきたいです。人々が助け合って生

札幌カリタス 第四回カトリック福祉施設の集い

この集いは、札幌教区の札幌カリタスが主催し、教区内の社会福祉法人の設置者と施設管理者等を対象に、カトリック精神を生かす実践的の紹介や講演を行うと同時に、福祉施設が抱える様々な課題を分かち合う。教区内には七つの法人に、大きく分類して十二の施設がある。

午前のセッションは、函



館の旭ヶ岡の家でチャペルサービスの一環で行っている「それいゆクラブ」を、ボランティアの人たちによるキリスト教のお話を中心に市毛晋氏が紹介。市毛氏は、あるマスコミ取材者が『創設者のグロッド神父は絵描きでありアーティストである。旭ヶ岡の家は「信仰・美・遊び心」の三つで表される。』と語っている。と述べ、グロッド神父は常々「カトリック施設にはチャペルサービスが大切に重要である」と語っている

とも紹介。

「それいゆクラブ」の始まりは二人のマスール(白百合学園のシスター)で、開設三ヶ月目には行われていたと記録されている。それいゆクラブの目的は、入所者がホームで心豊かに安心して過ごせるように、その一助として、神のみ言葉にふれる機会を設けるため、誰でも自由に参加できる。ターミナルケアに至るまでの内的狙いがここにある。

毎週土曜日の午前十時三十分からの一時間。「祈り、聖歌」に始まり、「聖書に



関するビデオや、テキストを利用した聖話をを行い、「祈り、聖歌」で終了する。午後のセッションは、北広島・天使の園の子ども達の入所理由の変化と、子どもたちへのグリーンケアのあり方について渡辺憲介氏が紹介。

現在は、開設当初と入所理由が大きく変化し、そうと思われるものを含めると『虐待』が入所理由の八〇%になる。そして、そのうち六〇%がネグレクト(養育放棄・拒否・無視)で、この場合ケアするのに長い時間が必要となる。

また、虐待を受けて入ってきている子には、同時に、発達障がいの子が多いのも実態である。この場合、指導員だけでは対応が難しいので、専門家のケアが必要となる。しかし、限られた人員と時間の中での対応となるので非常に難しい。

なお、発達障がいの入所者が多くなっている背景には、行政として、小さいうちには、知的障がい児というレッテルを貼らないようにしている面があり、天使の園のような施設に送られてくるとのことである。

「管理ではなく、支援す

ること」が私たちの務めであり、「世の中で一番弱い人のためにキリストの愛を實踐すること」が私たちの大切な務めである。そのため、カトリックの福祉施設として、教会として、聖職者を含め私たち信者として、何が出来るか、何をなすべきかを常に見つめなおす必要があるだろう。

第十回 国際デー開催

晴天の秋空の下で記念ミサとイベントを行う

今年も九月の第四日曜日の世界難民移住移動者の日である二十七日に、国際色豊かな感謝のミサをベトロ地主 敏夫 司教の司式で行った。日本語と英語の入祭の歌から始まり、共同祈願ではオセアニア、アフリカ、アジア、北米と南米、ヨーロッパ、日本のそれぞれの地域・教会のため、全世界の全ての教会のために祈った。

昼からは隣接する聖園幼稚園の園庭で南米、北米、アフリカ、アジアなどから十四ヶ国が各国の食べ物や民芸品を出展し、三十ヶ国

の約八〇〇人が参加し、クイズなどの余興や、語らいを持ち、楽しい時間を過ごして互いに親睦を深めた。

札幌教区内に在住するこれらの国々の人たちの宣教師牧に取り組んでいるマイレット神父(住ノ江、富岡主任)は、札幌教区に在住する外国人の方たちの中には、様々な問題を抱えている人もいるので、他の教区での取り組み等も勉強しながら、うえるかむはうすを中心に、それらの人々のケアに取り組んでいきたいと語っている。



笑顔一杯の 雪の聖母園学園祭

九月二十日(日)晴天の下、よきこいソーラン踊りや小学校のブラスバンド演奏、手打ち蕎麦や清水沢学園のカレー、焼き鳥や採れたての焼きトウモロコシに舌鼓をうつていた。嬉しそうな園生



の笑顔がとても印象的な学園祭だった。

JOC(カトリック青年労働者連盟)六十周年を祝う

九月十三日(日)札幌働く人の家(月寒)で、OB、OGや関係者が集い、若かりし日の仲間たちと久しぶりに会って、懐かしく、楽しい時間を過ごした。

一九四九年にパリ外国宣教会のJ・ムルグ神父が、福岡県小倉でカトリック青年労働者の集いを開き、「カトリック青年労働者連盟」が結成されたのが日本でのJOCの始まりである。全国数ヶ所に「働く人の家」があり、青年労働者のために解放されている。

この日、数人から現在の報告がなされた。善い悪いに係わらず、好むと好まざるに係わらず、青年はその時代に生きていかなければならない。非正社員の人

は、現状では次々と仕事を換えざるを得ない。そして、仕事があるだけで・・・という状態になる。当然、働く喜びや誇りなど生まれてこない。こころの安らぎもほとんどない。規制緩和という名の下に、働く人の身分や権利を守ろうとする法律がなくなると、国際競争の中での企業の利益だけ守ろうとしている。どこかおかしい。

JOC設立当初と、社会情勢や労働条件が様変わりした現在、キリストの愛を實踐するために、私たちは今、何をすべきだろうか。主は、本当に今、私たちに何を求めているのかと自分に問い直さずには居られない気がした。

「フランシスコ修道会創立
八〇〇周年」をテーマに

旭川地区 カトリック大会

八月二十三日(日)、旭川地区カトリック大会が、大雪クリスタルホール(旭川市神楽三条七丁目)で開催され、地区十四教会から約五〇〇名が参加した。

今年で四十一回目を迎える今回の大会は、旭川市内四教会の実行委員が中心となって、昨年からの準備が進められて来た。

午前の部では、東京聖アントニオ神学院教授の石井健吾神父による講話がありました。「平和と環境の使者 アシジの聖フランシスコ」

の演題で、フランシスコの自由奔放な人間性や、両親に深く愛されていた生い立ちなどについて、ユーモアたっぷりの語り口で話された。

また今回は、大会の目的の一つでもある旭川市外からの参加



者との交流を図るため、ロビーにそれぞれの教会の広報誌や活動内容などを紹介する展示コーナーを設けるとともに、昼食時間をたっぷり取り、皆で同じ昼食をいただきながら、分ち合いをするため、お弁当を安価で斡旋するなどして、参加者同士の交流が図れるよう工夫を凝らした。

午後の部では、地主敏夫司教の司式による共同ミサが行われ、旭川地区の信徒が一同に会して主の食卓を共にした。

次回大会は、二〇一〇年八月二十九日(日)に同じ大雪クリスタルホールで開催される予定である。

函館地区合同黙想会

十月二十四日(土)午後四時から加藤鐵男神父さま(大麻教会主任司祭・教区事務局長)をお迎えし、宮前町教会聖堂に於いて地区合同黙想会が行われました。

四十歳で奥さんに死別され、一人で二人の子供を育て終え、五十二歳で神学校に入られ、六十一歳で叙階を受けられた、稀有な経歴を持たれた加藤神父様のお話を期待と興味を持ってお聞きしました。奥様の発病、司祭との出会い、洗礼・死別・苦悩・生活の変化。加藤鐵男さんの教会との出会

釧路地区信徒大会

八月三十日(日)に釧路教会で、六名の司祭を含め九小教区から一四九名が参加して行われた。

今年、フランシスコ会創立八〇〇周年という記念すべき年。この年に相応しくテーマは「司祭は語る―私の召命―」と、この春に宣司評運営委員会でテーマが決定されると、事務局では大会に向けて周到に進められ、多数の参加者が集うことができた。

い、子供達と一緒に受洗、神学校に至るまで、神学校生活、息子さんの病氣、等々。しかし、六十二歳の若い神父様のお話は、本人の経歴話し以上に、神様の御旨・業・許しを熱く語られました。「神様の御旨は何だろうか？私たちが、いつも心がけておかなければならない事は、それを通して神様は私たちに何かを語りかけようとしているのではないか？神の問いかけの中に神様の御旨・業を見なければならぬ、私の召命もそうだろうと思う。」息子さんの病氣の中に神様の働きを実感し、「御

旨を何時も心がけていなければ成らない。神様を信じ、御旨のままに生活していくことが大事ではないか。親子関係は神と人間の関係と似ている。」人を許し、現実を受け入れ、相手を敬い、尊敬し、交わりをすることが大事。ゆるしによる希望、神様の子供である人間への愛を、家族生活の実体験、仕事上の体験を基に熱く話されました。神父様の口からどんどん出てくる、「家内・妻・娘・息子」の言葉に不思議を感じましたが、その言葉に暖かさも感じた一時間半でした。
(研修部長 中井高司)

大会は、午前十時三十分から始まり、午前はフランシスコ 関口七郎神父の司式で、来釧中のペトロ 阿部慶太神父(釧路出身、田園調布修道院)も加わり六名の司祭によるミサが行われた。関口神父は説教で、ご自分の召し出しについて分ち合せて下さった。

午後には、「聖フランシスコの平和のための祈り」の聖歌斉唱に始まり、中田委員長長の司会で、ヨハネ内藤孝文神父、ルカ・ボナヴィゴ神父、カリシモ・ロン

デロ神父、ナルチゾ・カヴァツオラ神父の順で、それぞれに独特のユーモアを交えた口調で、かつ減多に語られることのないそれぞれの召し出しへの秘められた思いを披露してくださった。

終わりに信徒からそれぞれの主任司祭に花束を贈呈。そして、最後にカリシモ地区長から閉会の挨拶を頂いて、来年の再会を願って散会。思い出に残る大会となった。



北見地区 カトリック大会



今年の大会は北見を離れ、八月三十日（日）遠軽教会とひばり幼稚園を会場にして、「派遣されている私たち」をテーマに約七十名の修道者・信

徒が集い開催。

大会一日がミサというスタイルで、み言葉の典礼、分科会を行い、最後に感謝の典礼を行い、人々の中へ派遣されているキリスト者としての喜びを新たにしたい大会だった。

分科会では、昨年の大会のライヤ神父の講演をもとに「聖書」「家庭」「祈り」「秘跡」「共同体」「愛」をテーマに六分科会で分かち合い、その分かち合った願いと賛美を、感謝の典礼で祈りとして神さまに捧げ、地区長の川上剛神父の挨拶と派遣の祝福を頂き、実り多い大会を終えた。

「宣教する教会共同体へ」をテーマに

苫小牧地区 信徒大会

二年ごとに苫小牧ブロックと室蘭ブロックの交替で担当して開催

講師のジャクソン神父の講話と、それを聞きながら日本語を学ぶ宋神父の姿に感動したという。

信徒大会あれこれ

秋の日差しが温かく感じられる十月十八日の日曜日、苫小牧市民会館で第十二回カトリック苫小牧地区信徒大会が各地区から一三八名が参加して開催されました。

当日は九時三十分から受付が始まり、開会式が十時から行われました。わたしは心に残るお話が聞けることを期待し、また、

各地区の教会の人たちと久し振りに会ってお話ができることを楽しみに、この大会に参加しました。

開会式が終わると午前中の講話が始まりました。講話は十時十五分から一時間十五分。講師はメリノール宣教会・草津教会のジェームス・ジャクソン神父さまです。

午前中の講話が終わると昼食。ホッキ弁当でした。このお弁当、係の人の配慮で大きなホッキを使った特注のものとのこと、とても

おいしいお弁当でした。久しぶりにお会いできたベネディクト会の友人のシスターや女性大会の時に知り合った人たちのさり気ないおしゃべりは楽しいものでした。

お昼の休憩時間が終わると午後の講話が十二時三十分から十三時三十分までありました。講話が始まると、昼食後のことでもあり、ねむくなり、うとうとしながら聞いてしまいました。

ジャクソン神父様の口から出た「モンテッソーリ」ということばに懐かしさを感じました。

子どもの自発性を重んじるモンテッソーリの教育法を知ったのは、四十年前以上も前の学生時代のことです。この教育法について学んだ授業のことを思い出したので。また、講話中に感動したことがありました。それは、わたしの前の席に座っていた東室蘭教会の宋神父さまの姿でした。

講話が始まると神父さまはメモをとり

ながら、電子辞書を使って講話に出てくる同音異義語の意味を調べ始めたのです。わたしは「しめい」という言葉は「氏名」なのか、それとも「使命」なのかなど、いくつかの言葉の意味を周囲の人たちと共に教えることができよかったです。

思いました。そして、神父様の日本語を学ぼうとする真剣な姿に感動したので

講話の後、御ミサがあり、信徒大会は三時過ぎに終わりましたが、わたしは「とし」のせいでしょうか、少し疲れてしまいました。

(君嶋 聡子)

苫小牧地区 女性大会

「私たちの中にはたらいっている愛」というテーマで、トニー・ゴルマン神父の指導で、八月二十九日（土）午前十時から午後四時まで七十三名が参加して開催。

とても有意義な時間と分かち合いをもてたようである。参加者の感想を紹介。「まだ日本語のたどたどしいトニー神父様でしたが、一所懸命に言葉を考えて

てください、私たちに伝えるように心を込めて話して下さる姿に感動しました。

一人ひとりへ霊の働きがあり、それを喜びをもって受け入れなければならないこと。湧き出る水、聖霊の水として、水は養う全てのものの中に入り、全てとなると語られました。

そして、キリストを知るといことは、私たちが中で働いているキリストを知ることです・・・と。神学的でありながらも、身近なことでもあるな〜と感じてきました。今回は、講話毎に分かち合いがあり、いつもの大会よりも時間をとってくださり、ゆつくり分かち合いができた事をもとても良かったと思っております。ちなみに、私たちのグループは、人の話すことに良く耳を傾け、自分も心もとなく話したりしながら、とても優しく嬉しい時間を過ごさせてもらいました。

感謝です。」

一人ひとりが違っているように、霊の働きも一人ひとり違うことを確認し、それぞれの教会に戻ってから、ももっと霊的な話をして、互いに高めあっているように感じたそうである。



神と出会う、イエス・キリストと出会う、

自分と出会う

オリエンズ宗教研究所「カトリック通信講座」



キリスト教を知りたい、学
びたいと希望されながら、
様々な理由で教会にいらっ
しやれない方や、受洗後、
より学習を深めたい方々に
最適です。「幸せな結婚」
は結婚準備講座としても、
活用いただけます。

オリエンズ宗教研究所カトリック通信講
座(03-3332-7601)
のホームページをご覧下さい
● パソコンサイト
<http://www.oriens.or.jp/>
● 携帯サイト
[http://www.oriens.or.jp/
mobile/](http://www.oriens.or.jp/mobile/)

ど、現代の多くの選択肢か
ら選ぶための基準を考察
(第三講)
子どもとともに、家庭や学
校で命について学びあうた
めの提案を考察
(第四講)
日本人の生命観と命をとり
まく現代社会の問題点の考
察
(第五講)
聖書や日本の法制度に照ら
しながら考える、産む・産
まない選択を考察
(第六講)
体だけでなく精神的、社会
的にも人間らしく幸せに生
きるための考察
(第七講)
高齢化社会を積極的に生き
るために、老いることの社
会的意味を考察
(第八講)
命の尊厳と愛について、
ターミナルケアのあり方の
考察
(第九講)
「みどり」の実例から考え
る終末期医療・臨終の意味
を考察
(第十講)
すべてのものと共存してい
くための新しい倫理の視点
を考察

- T001 キリスト教とは
- T002 聖書入門(Ⅰ)
- T003 キリスト教入門
- T004 神・発見の手引
- T005 聖書入門(Ⅱ)
- T006 幸せな結婚
- T007 生きること・死ぬこと

〈受講料〉
T001～T004 四千五百円(教材費・税込)
T005～T007 五千円(教材費・税込)
〈申込方法〉
郵便局に備え付けの振替用
紙に、ご希望の講座名、講
座番号(T001～
T007)
を記入の上、受講料を次の
講座にお振込み下さい。
振替口座番号
0017012184745
加入者名
オリエンズ宗教研究所
詳しくは、オリエンズ宗



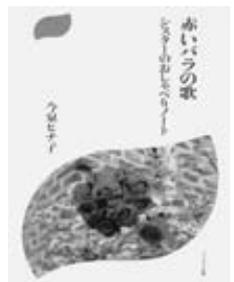
どなたでも、いつか
らでも、どの講座でも、
ご自分のペースで受講
いただけます。

わかりやすく書かれたテ
キストを読んだ後、解答ハ
ガキの設問(三～四問)に
答えを書き込み返送いただ
く方法で通信を行います。

例えば、
「T007 生きること・死ぬこと」は、
全10講
(第一講)
人間の誕生や生活を通して
考える、命のかけがえのな
さを考察
(第二講)
延命治療や生殖補助医療な

新刊の紹介

「赤いバラの歌」シス
ターのおしゃれリノー
ト」
定価七三五円(税込)
ドン・ボスコ社刊



尖塔を見るたびにイエ
ス・キリストの愛を思い
出す。
季節の移ろい、日々の
情景、友人との会話や出
会い・・・日常の出来事
一つひとつに心を留め、
感動し、その全てに神の
計らいを見出す今泉ヒナ
子シスター(コングレガ
シオン・ド・ノートルダ
ム修道女会)の、幸せに
生きる秘訣が一杯詰まっ
たエッセー集。

白石等のカトリック墓地内の個人墓地返還について

白石等に個人墓地を所有
する皆さんへ

① 札幌市の方針によ
り、親族以外の他の方
に、墓地使用权をお譲
りすることは出来ませ
ん。

② 他の墓地へ改葬した
り、墓地利用を取り止
めて返還する場合は、
直接、札幌市への返還
手続きとなります

【返還の手続き方法】
札幌市に事前に確認の
上で、墓地返還届と墓地

使用許可証等を提出して
下さい。

【問合せ先】

札幌市保健福祉局健康衛
生部生活環境課墓苑管理
係
(大通西19 ウエスト19
札幌市保健所三階)
TEL 011-616-1616
— 二八五五

【注意事項】

① 返還の際は、予め、
墓地を更地にして返還
しなければなりません
のでご注意下さい。
② 返還された墓地は、
更地のまま保全されま
す。

教区の風

※皆様からの思いやお考えを掲載するコーナーです

司祭年に思う 「奉仕者」

司祭の召命が減少していく中で、オリエンズ宗教研究所の「典礼奉仕への招き」を読み一考させられました。

中世になって教会のあり方が「小教区と主任司祭」を中心とする形になる中で、ほとんどの奉仕を司祭一人が担当するようになり、助祭職の必要性が減り、助祭といえは神学生が司祭になる直前の実習期間となつてしまひ、同様に「祭壇奉仕者」「朗読奉仕者」も歴史の中で、神学生が司祭になる過程で受けるものとなつて行つたそうです。しかし、古代教会では、司教を中心に司祭団や助

祭たちが共同して働く、ある種の「共同司牧」のようなチームワークで教会共同体への奉仕が行われていたと聞きます。本来「仕える者」という意味を持つ「助祭」は古代の教会では司教のもとで教会の運営や財産管理を担当し、貧しい人を助け、病人の世話をするといい教会の大切な役割を担つて、そして礼拝の場でも司教を直接助ける奉仕者として活躍していたそうです。これは、助祭は実際の共同体の生活の中で「奉仕者」であつたがゆえに、典礼の場でも「奉仕者」としての役割を担つたのです。助祭に限らず「奉仕」ということは決して典礼の中だけで行われるものではないと

いうことです。むしろ、実際の生活の中で奉仕を生きることが前提にあって、そのことを典礼の場で目に見える形で表すことが「典礼奉仕」とのことです。

そして、典礼や秘跡における奉仕だけでなく、教会の活動の中の「仕える・愛する」という本質的な部分を表す大切な役割を担っているとも述べています。

財産や家族など周りのものを全て失つたとき、その人を通して神様が現われてくると言われます。司祭や修道者の召命が減少していく現代にあって、司祭・修道者・信徒が一緒になつて「奉仕者」「仕える者」のあり方を見つめなおすよい時期なのかもしれません。神に与えられたその時なのかもしれません。(H)

編集後記

カトリック新聞の神父燦に祐川郁生神父が掲載されていた。小さい頃からパリミシヨンの神父に影響を受けた師の夢は「日本宣教会」を作ること。国内の宣教のためにも、外との交流などが活力を与えるヒントになると語っている。

限りある司祭の中から海外の宣教会が宣教師を日本に派遣してくれたように、日本の召命を目指す人々の一つの道がここにあるのかもしれない。カトリックは初代教会からグローバルなものであつた。現代の私たちも先人に倣ひ、いろいろな意味での教会本来のグローバルさを見つめなおす機会としたい。(編集子)

訃報

※神さまのみもとでの安息をお祈り下さい

■フランススコ会
ゴフレド・ルナルディ
神父



イタリアのバードヴァで、健康状態が悪化して十月十九日に病院に運ばれ、二十日の朝八時四十分五分に神さまのもとに召されました。一九五六年に来日以来、健康上の理由で二〇〇五年にイタリアへ帰国するまで、釧路地区で四十九年間司牧に務められた。享年八十歳

【略歴】

- 1928年11月18日 イタリア Betsina Vicenza に生まれる
- 1946年9月7日 着衣
- 1947年9月8日 初誓願
- 1952年12月8日 厳誓願

1954年6月27日 司祭叙階

1956年7月20日 来日

中標津、帯広、釧路新川、根室の教会で主任司祭を歴任し、その間に釧路地区長も務められる

2005年10月18日 帰国

2009年10月20日 帰天

■マリア会
ヨハネ・マリア・ピアンネ
深堀 英二神父



東札幌病院で前立腺瘤のため十月十六日午前六時九分に神さまのもとに召されました。葬儀ミサは北十一条教会で十八日に厳かに営まれました。

札幌光星中学・高校の校長を務められ、青少年の教育に一生を捧げられた。享年七十二歳

【略歴】

- 1937年8月7日 生まれ
- 1925年2月1日 山形県米沢市に生まれる
- 1959年 入会
- 1963年 初誓願
- 1968年 終生誓願
- 2009年8月5日 帰天

1937年8月9日 受洗

1956年3月26日 初誓願

1961年8月2日 終生誓願

1969年7月6日 司祭叙階

2009年10月16日 帰天

■シャルトル聖パウロ修道女会
Sr.スール・マリア・ヨハンナ 橋本 すみ子

八月五日午前十一時四分に神さまのみもとに召されました。入会から修道生活五十年の年でした。九段、函館、片瀬、高田、八代、緑ヶ丘、目白山、仙台、山の手修道院で主に裁縫など院内の仕事に従事し、旭ヶ岡の家で二〇〇二年から五年ほどボランティアをしていました。享年八十四歳